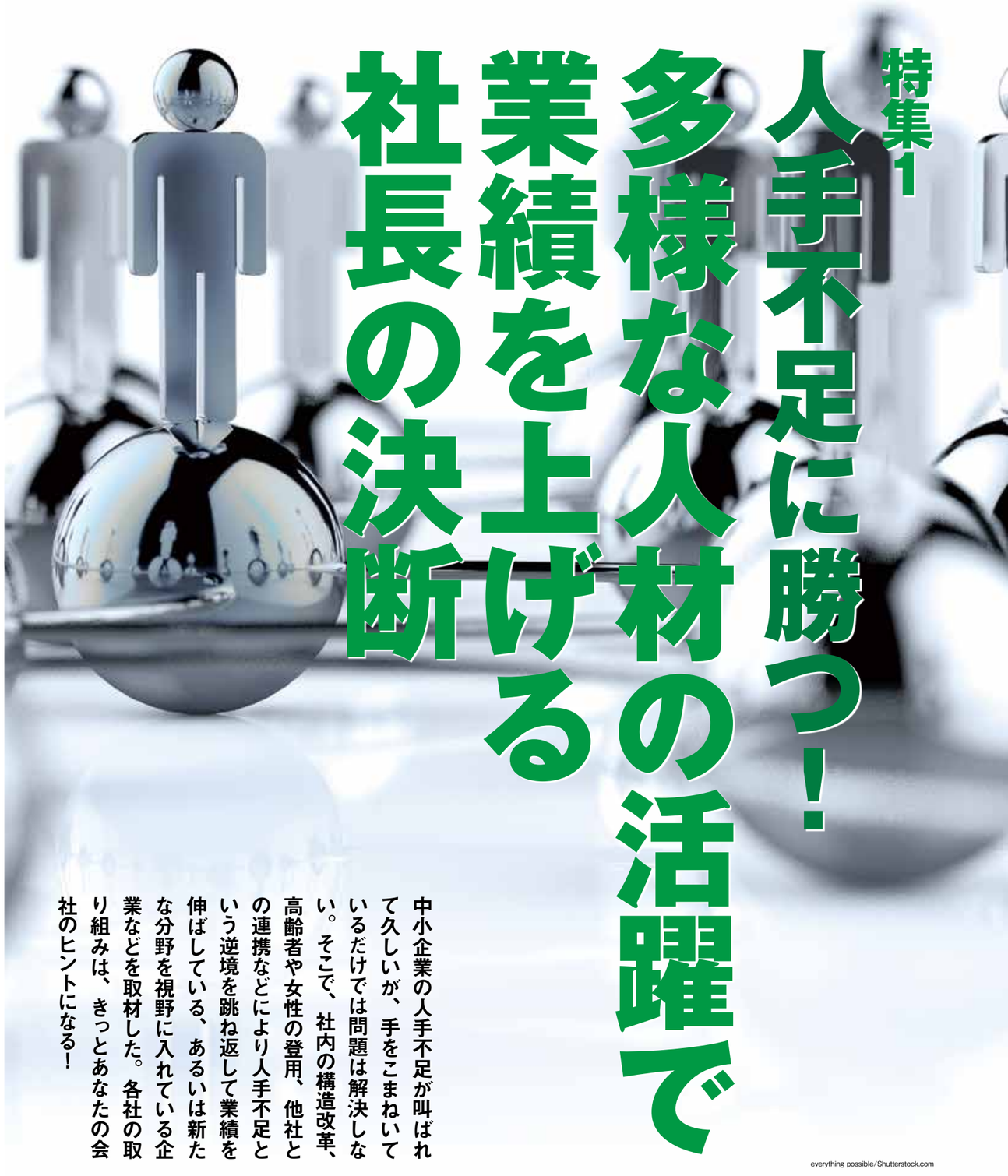
特集1

人手不足に勝つ！多様な人材の活躍で業績を上げる社長の決断



中小企業の人手不足が叫ばれて久しいが、手をこまねいているだけでは問題は解決しない。そこで、社内の構造改革、高齢者や女性の登用、他社との連携などにより人手不足という逆境を跳ね返して業績を伸ばしている、あるいは新たな分野を視野に入れている企業などを取材した。各社の取り組みは、きっとあなたの会社のヒントになる！

everything possible/Shutterstock.com

障害者や高齢者を正規雇用し、大手が敬遠する戦略で売上回復

クラロン

福島県福島市

社名	株式会社クラロン
住所	福島市八木田字並柳 58
電話	024-546-0135
代表者	氏川守義　代表取締役社長
従業員	134 人（非正規雇用０人）

福島市にあるクラロンは、学校専門の体育着を製造・販売している。同社は、平成27年「第5回日本でいちばん大切にしたい会社」大賞で同年より創設された厚生労働大臣賞に選ばれ、一躍全国に名が知られるようになる。授賞理由にもなった人材獲得と育成には、創業者の「経営理念」があった。

34年五輪開催決定を機に学校体育着専門メーカーへ

「もちろん毎朝社員と同じように出勤しています。私は何よりも会社に来て、社員の顔を見ることが大好きなんです」と話すクラロン取締役会長の田中須美子さんは、なんと御年91歳。田中さんは、故田中善六さんと二人三脚で昭和31年クラロンを創立し、しばらくは、綿メリヤスと呼ばれる肌着の製造を行っていた。平成14年に氏が亡くなると二代目社長を継ぐ。そして2年前、現社長に会社経営は委ねたが、今なお〝現役〟として社内外へ目を配っている。

「今では、福島駅から近いこの辺りも人が増えてにぎやかな住宅地になりましたが、当時は吉井田村と呼ばれる畑と田んぼが広がる農村地帯でした。一面農地が広がるこの場所に先代社長が肌着の縫製工場をつくり、近所の農家の奥さんが農閑期に働きに来ていました」

昔から福島市周辺は、メリヤスや肌着の製造が盛んな地域である。後発の同社にとって、肌着の製造だけでは先行きに不安があった。新たな策を探していた先代が飛びついたのは、昭和34年東京五輪開催決定だったという。

「先代社長が『これからはスポーツが盛んになる。子どもも増えるし、学校がなくなることはない』と、肌着の製造・販売へ切り替えたのです。当社のオリジナル・サンプルを作り、東北の学校へ営業に行きました」と、田中さんは当時を振り返る。昭和30年代は戦後のベビーブームで、全国的に子どもの数が爆発的に増加し、福島県内でも新設校が次々とできていた。

▲クラロンではどんな要望でも、たとえ１着だけであっても顧客からの注文に応じている

▶「お客さまも社員も大事にして、これからも当社は『福島製』にこだわった製品をつくり続けていきます」と、田中さんは意気軒高と取材に応じた